

## 人間としての活動

北海道大学 経済学部 2年

山上咲子 01130049

### 1. はじめに

アレントは、1906年にドイツでユダヤ人家庭に生まれた女性政治家である。ナチスのユダヤ人排斥政策の影響を受け、アメリカへ亡命するなど、自身の境遇も背景にして、20世紀の社会とそのもとにある全体主義を分析し、その問題を追求した。

本の題名である「人間の条件」は、人間は何をしようといつも条件づけられた存在である、ということの意味している。人間がかかわるものは、人間が生きていくうえで不可欠なものであり、それ故に人間の条件と呼ばれるのである。そして、その人間の条件の中心にあるのが地球である。様々な人工物を作り出している人間にとって、地球とは人間の力によらず存在し動く唯一のものであり、また、人間は地球に拘束されているからである。

ところが今、人間はそのような人間の条件による拘束から、脱出しようとしているのである。その典型的な例が科学であり、宇宙に行くことによって外から地球を眺め、取り扱うことを考える。同様に、人工授精という方法によって、生命を試験管の中で作り出し、自然に生まれてくるはずの子供を選択することも、人間の条件から逃れたいという欲望によるものである。

このように、人間の条件の中で生きる人間が、その束縛から逃れたいとして活動する社会において発生する問題とはいったい何であろうか。一つは言論の滅失である。言論は、人間の政治分野に深く結びついており、人間にとってもっとも重要な能力とされる。そのような言論が滅失しているという事実は、科学においてみられる。科学者は、あらゆる発明をし、それを証明するために、言語ではなくそれを超越する記号を用いる。このような場面では、言論は役に立たず、言語に翻訳できないような数式によってばかり語られる。このように、言論、すなわち政治と切り離された科学によって進められる人間社会は、認められるであろうか。もう一つの大きな問題として、イノベーションによるあらゆる機械の開発が、労働者の役割を奪っていることがあげられる。現代は、労働社会として発展してきたが、その中でも労働者は労働の重荷に対して反抗し、自由を求めてきた。しかし、そのような労働者から労働を奪うということは、同時に、自由になりたいという欲望をも奪うことになるのである。労働者の持つ唯一の活動力である労働を奪うことは、何をもたらすのであろうか。

### 2. 現代社会における論点

述べてきたように、人間は人間としての条件に縛られている一方で、科学によってあらたな発見や発明を目指している。それに伴う危険や問題点は少なからず発生している。そのような危険や問題点として、言論の滅失と労働社会の変化について、具体的に検討していき

い。

ここで、前提として述べておきたいのは、アレントが考える人間の活動についての定義である。アレントは、人間の生活を「活動的生活」と呼び、その中で行われることを、労働、仕事、活動の三つに絞って考えた。

### ○活動的生活

「活動的生活」という用語は、アリストテレスの時代から存在し、その厳密な意味合いは変化しているものの、人間が何かに積極的にかかわり生活することを意味する。この生活では、人間と人間が作り出したものの世界が中心にあり、言い換えると、人間の活動力なしには成り立たない。例えば、あらゆるものは製作するという人間の活動力なしには存在しないし、農耕地はそれを管理する人間の活動力なしには存在しないし、政治体は組織し、樹立するという人間の活動力なしには存在しえない。この「活動的生活」の中で行われる、労働、仕事、活動について以下で考えていく。

#### ・労働

人間は労働することによって、生きる上で必要なものを生み出し、同時に消費している。この点において、人間が成長し代謝を行うという生命過程は、労働に深く関係している。

#### ・仕事

人間の仕事という行為は、人工物を作り出すことであり、それは自然環境とは異質の人工の世界を生み出すことを意味する。そして、その世界の内部で安住すると同時に、世界は永遠に存在するようにできている。

ここで、労働と仕事について、両者は同じであるとみなす見解も存在するが、筆者は異なるものとする。それは、労働が自由を求めて軽蔑される対象であり、奴隷が行うものであったのに対し、仕事は公的領域で自由を保持して行われるものだからである。

#### ・活動

人間が活動するとき、直接関係するのは人間であり、その間には、物は介入しない。このように、人間は決して同一な人など存在しない他人とかかわり合い、常に他人の存在が保障されているという点において多数性という性質がある。そして、この性質は政治にとって必要不可欠なものである。

### 3. <言論の滅失>と<労働社会の変化>

#### <言論の滅失>

言論がなくなることは、科学の発展によって学者が記号を用いるようになったことに見られるのであるが、このことが我々の社会にもたらしている影響とはいったい何であろうか。

#### ●アリストテレス 活動と言論

アリストテレスは、政治的分野における人間の能力として、活動と言論を挙げた。そして、

それが可能になるのはポリスの創設によってのみであると考えた。ポリスとは、もともと饒舌な政治体であると言われ、その内部では力や暴力によらず、言葉や説得によって、話し合い、決定がなされていた。そして、このポリスの領域は、家族の領域と対置され、公的領域と私的領域に対応する。このようなギリシアの思想において、家族は人間が自分自身の生活を持つためには必然的なものであるがゆえに、ポリスが私的な領域に侵入することはなかった。一方で、ポリスは自由な領域であり、自由のために政治的権威による抑制は正当とされた。このように、公的な領域と私的な領域は明確に区別されていた。

しかしながら、その境界線が曖昧になっているのである。古代人が私的領域に、仕事からの解放を求めていたのに対し、近代では人々は親密さを求めている。そして、個人主義によって私的領域が豊かになり、経済的な集団や社会を家族のようにみなすようになった。

### ●活動と言論

人間は、自分自身のことを理解させるために言論を用い、活動を行う。この点において、人間の多数性とそれに伴う差異性は必要条件である。言論と活動によって、我々はそれぞれに異なる自分の存在を明らかにしているのである。そして、言論なき生活や活動なき生活を考えてみればわかるように、言論や活動がなければ、人間としての生活は成り立たないであろう。そして、活動はその活動をおこなう主体によって、言論を用いることで理解され、意味あるものとされる。もし活動に言論が付随されていなければ、活動者は存在せず単なるロボットであるとみなされる。

一方で、活動以外の行為では、言論は情報伝達的手段として用いられる。労働や仕事を行うにあつて、他者と言論を行うことは必ずしも必要とはされないからである。そう考えると、言論の役割を記号がとってかわることも可能になる。分野によっては、言論よりも記号によって情報のやり取りをする方が、むしろ取り扱いやすい、というような状況もあるだろう。この結果、もたらされるのが次のような結末である。それは、言論を用いないゆえに、道徳的な性格が欠如した科学者たちによる、誤った判断であり、そのもっとも重大な例が原子兵器の開発を拒否しなかったことである。もう一つの結末の例としては、言論を用いない政治、暴力によって人々を制圧する、いわゆる恐怖政治や独裁政治である。

## <役割を失った労働者>

### ●労働に対する評価

労働は、古代における理論では軽蔑の対象であったが、近代の理論では賛美の対象とされた。なぜなら、古代においては、苦痛の伴う努力をして行われるものとされたのに対して、近代では労働者が生産を行うものとされたからである。そして、そのように労働が称賛の対象とされた大きなきっかけは、ロックやアダム・スミス、そしてマルクスの理論である。彼らは、労働がすべての生産性の源泉であり、人間性そのものを表す最高の能力であると考えた。

### ●マルクスの矛盾

上のように述べたマルクスであるが、その理論には根本的な矛盾が生じている。それは、労働という活動力が最も人間的で生産的である一方で、革命の目的が人間を労働から解放することにある、ということである。さらに、人間を労働する動物であると定義している一方で、労働のない社会に人間を導いている、という矛盾も存在する。

そして、マルクスは労働と生殖が生命過程の中で、繁殖力を持つただ二つの方法であると述べた。労働が個体の生存を保証するものであるように、生殖は外来の生命を生産するものである。このような繁殖力は、我々の社会に豊かさをもたらすものである。

これに対して、筆者であるアレントは労働について、生命過程において常に終わりなく続き、意図的な目的や決定を超越しているという点で、唯一の活動力であると考えた。

#### ●労働の私的性格

労働は、人間の活動力の中でも最も肉体によって拘束されている。そして、肉体的機能とは究極的に私的なものであると言える。しかしながら、近代の発展と社会の勃興によって、公的なものへと進化した。この事実は、労働と同時に私的な財産が、増大する富に対抗できるのかという問題につながる。これを解決したのが、私有財産制と消費という活動である。

労働を生命の自然的条件とした奴隷は、同時に、消費をも自然的条件としていた。労働の道具が改善されたことで、その労苦や努力が大きく和らげられたことは確かである。そして、仕事によって作り出された道具は、奴隷の代わりに言葉を発しない機械人間を作り出した。しかし、それは人間に自由をもたらすことを意味しなかった。なぜなら、人間は奴隷のように自分を必然から解放したいという葛藤の中でのみ、自由を感じるからである。そして、このようなオートメーションの発達は、労働時間を短縮化し、余暇をもたらした。その結果、次々と生産される物を、生命にとって不必要な物までも消費するという、浪費経済をもたらしたのである。このような社会で、人々は苦痛や努力という必要によって生かされているにもかかわらず、その緊急性に気付くことができない、という危険がある。

#### 4. まとめ

人間はこれまで、自然から生まれ自然によって生かされている生き物と考えられ、神によって作り出された、地球に縛りつけられた被造物である、という考えもが存在した。

このような存在であった人間が、自らの能力によって地球から離れようとしたり、人間を作り出したりすること、同様に、労働を機械的な人間の手によってなし、次々と物を生産することは、単に人間の本来の姿を失うという結果をもたらすだけではないように思う。

人間は常に将来を予測し、あらゆる緊急事態に備え、注意を払っておかなければならない。これまで見てきたように、人間が発展させてきた科学技術は、見方によっては人間の短所となる。しかし、最新技術を開発するというのは人間にとって偉大な能力であり、それを発生した危機にうまく適用することは可能であろう。人間の作り出したものが、危険の原因となっても、言論を用い判断し、技術によって対応する、ということが、その条件に拘束されいながらも人間には必要であり可能であると考えられる。

●参考文献

『人間の条件』ハンナ・アレント 訳：志水速雄 （筑摩書房 1994/10/6）

(4671 字)